石油鉱業連盟企画調査部長
t.shoji@sekkoren.jp
庄司　太郎

イスラム文化との接近遭遇（その3）
～「IBM」と「3M」～

はじめに

「イスラム文化との接近遭遇」と題して、石油資源の開発を通して得た自分の体験や、見聞きした面白いエピソードを紹介し、アラブ・イスラムの社会状況を知る材料にしていただこうと、これまで２回にわたっていくつかのテーマを取り上げてきた。(石油・天然ガスレビュー 2006.7 Vol.40 No.4, 2006.11 Vol.40 No.6参照)

今回は、中東やアラブ圏で生活・勤務した日本人であれば、ビジネスや日常生活のなかで誰もが「なるほど」と思うムスレム（モスレム、ムスリムとも言う。イスラム教徒を指す）の考え方のベースを、いくつかのキーワードで読み解きたい。

「IBM」と「3M」

のっけから有名な世界企業の名前がタイトルになっているので、何だろうと思う方々が多いと思う。IBMは言わずと知れた総合IT企業であり、３Mは「ポスト・イット」などを生み出し、ハイテク付箋（ふせん）紙などで有名なアメリカの最先端優良企業である。

アラブ社会と「IBM」と言えば、ああ聞いたことがある、というビジネスマンは相当のアラブ通である。

イスラム教を社会の基盤にしているアラブ社会では、ビジネスにおいてもイスラム教の考え方が浸透している。このことは、キリスト教の社会や、儒教を社会基盤に持っている韓国や日本の社会が、ビジネスの根底にもそれぞれの宗教や社会規範を持っているのと同様で、あたり前のことである。

しかし、アラブ社会は、根源的にイスラム教の一神教に基づく契約の観念が極めて強い社会である。現在でも、世俗化の進んでいないイスラムの国々では、ビジネスにおいても約束が属人的ではなく、シャリーア*1というイスラム法の規制を受けることが常識と考えられている。

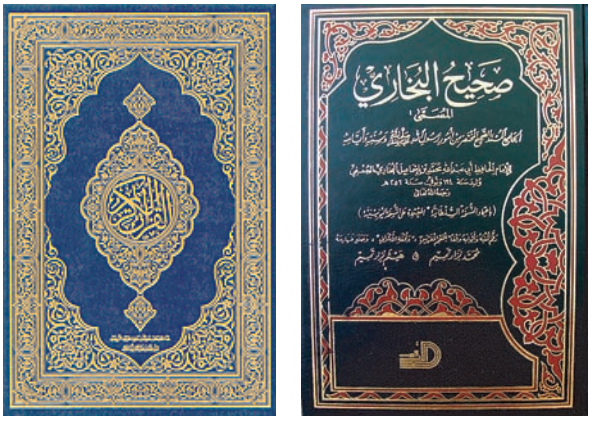
世俗化が進んだトルコやエジプトなどにおいても、商法・民法の解釈やその法理において、いまだイスラム法理が慣習法として相当の影響を与えているのだ。

しかし、欧米型資本主義社会のグローバル化により、商法や会社法の分野において国際的な取引を行う必要性から、シャリーアと矛盾しないように商法や会社法の取り決めを、英米法や大陸法から導入しているイスラム諸国もある。

最後の預言者と言われるムハンマド（モハメッドとも言う）は若いころ、メッカで隊商に参加した優秀な商人であったと言われている。

その働きと誠実な人柄を、豪商で寡婦の女主人ハディージャに見込まれて結婚するのであるが、その彼が、突然、絶対神の声を聞き、最後の預言者になる。そして、彼が神から預かった言葉からなる聖なるキターブ（啓典）*2が、聖典クルアーン（一般的にはコーランと呼ばれている＝写1）である。

また、ムハンマドの言行録であるハディースは、聖典クルアーンに次いで、ムスレムの模範とする教徒の守るべき



出所：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』とHilal Plaza.comホームページより

写1　クルアーン（左）とハディーズ（右）

＊1：シャリーア（Shari'a）は、イスラム教における宗教に基づく法体系。(世俗法的規定も含むため、単なる宗教法という説明は不正確)。イスラム法、イスラム聖法などとも呼ばれる。原義は「水場へ至る道」。シャルウともいう。シャリーアは宗教によって定められる法ではあるが、その内容は宗教的規定にとどまらず民法、刑法、訴訟法、行政法、支配者論、国家論、国際法、戦争法にまで及ぶ幅広いものである。シャリーアのうち、主に宗教にかかわる部分をイバーダート（儀礼的規範）、世俗的生活にかかわる部分をムアーマラート（法的規範）と称する。イバーダートは個々人と神との関係を規定した垂直的な規範、ムアーマラートは社会における諸個人間の関係を規定した水平的な規範と位置づけられる。ムスレムにとっては、シャリーアは人間ではなく神が定めた絶対の掟（おきて）であり、人間としての正しい生き方を具体的に示すものと見なされる。したがって、シャリーアはすべてのムスレムが守るべき普遍的規範であり、その意味でシャリーアへの服従はイスラムへの信仰と同義であると言ってよい（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋）。

＊2：啓典（けいてん）は、イスラム教において唯一神（アッラー）から諸預言者に下された四つの啓示の書物のこと。旧約聖書、新約聖書を内包する（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より抜粋）。

言行が記されているが、ハディースには、商取引に関することが意識的に語られているそうである。

ムハンマドは商人であったのだから、商慣習や商取引に長(た)けていたのであろう。

例えば、金利が禁止されているために、イスラム社会では欧米型の銀行制度が発展しにくかった。しかし最近は、イスラム金融という金融システムが隆盛となっている。

これは、原油・天然ガスの産油・ガス国が、原油高による膨大な外貨収入のうち自国内で使い切れない資産を、従来の欧米型のシステムから独立して運用しようとするものである。

しかし、イスラム銀行は、これまでも、利子取得を禁じているクルアーンに準じて金融業務を行っている。

私の経験になるが、最もイスラムの戒律の厳しいサウジアラビアの銀行では、車のローンのために例えば10万リヤル（現在１リヤルは33円相当）を借りると、最初に手数料（ハンドリング・チャージ）として金利相当分が差し引かれ、９万5,000リヤルが貸し出された。

また、給料の振り込みが口座に入金された際には、金利相当分が報償金（リワード）などとして付加されていた。これまでも、借り手と貸し手の間には欧米の銀行と同じような関係が、「金利」という言葉を使用せずに成立していたのである。

現在話題となっているイスラム金融にしても、銀行の投資先の要件をイスラムのシャリーアに基づいて宗教専門家に判定・審査してもらうことや、預金者が投資家として扱われるなどさまざまな擬態が見られ、結果として貸し手は、利子に匹敵する配当を受け取ることになり、支払い金利は手数料などの名目で徴収されている。

簡単に言ってしまえば、シャリーアへのコンプライアンスがなされていれば、欧米と同じ金融業務ができるというものである。経済活動に関しては、イスラムは実は現実的なのである。

さて、このような一般的な経済に関するイスラム社会の背景を理解した上で、今回の「IBM」の意味を考えてみよう。

アラブ社会でビジネス経験のある人なら誰でも知っていることであるが、「Ｉ」は「インシャーラ」、「Ｂ」は「ブクラ」、「M」は「マレーシュ」の最初のアルファベットである。

アラブ人のビジネスマンや商人を揶揄(やゆ)する「IBM」であるが、西洋人がアラビア語を耳から音を聞いて、うまくアルファベットにあてはめたのであろう。

私はあまりこの考えに与(くみ)しないが、一般的にはアラブ人気質を的確に表していると言われている。すなわち、約束をした直後に「インシャーラ」と相手に言われたら、「もしも神がお望みなら」の意味であるから、「約束が守れなくても神の御心(みこころ)であるからしかたがない」という意味になる。

自己責任が希薄の上、極めて不確実であるという意味なので、アラブ人の約束を信用してはいけないという話としてよく用いられる。

しかし、私が信頼する友人のアラブ人にこの意味を尋ねたところ、彼はこの場合の「インシャーラ」には、二つの意味があるというのだ。

ビジネスの約束・契約はアラブ人に限らず、相手をよく知り、観察し、言葉だけではなく、その他すべての要件を確認してから、信用できるかを判断し、然(しか)るべき相手と行うものである。この場合、「インシャーラ」と相手が発したら、よほどのことがない限り、「必ず約束を守る」ということだそうである。

これに反して、もう一つの「インシャーラ」は、一般的に言われる説に近く、最初から守る気がない場合の気の抜けたもので、どちらの意味で発したかを判断するには、相手を観察していればすぐに分かるそうである。

契約の民であるイスラム教徒の言行は、すべてアッラーが帳簿に記載しており、天国への最後の審判のときに使用されると言われている。このため、嘘(うそ)をついたとは記載されたくないので、「インシャーラ」と言うのさ、とその理由を解説してくれた。

然りである。「良い」インシャーラと、「悪い」インシャーラがあるといったところであろうか。

次に、「ブクラ」だが、「明日」という意味である。これは、アラブ人に限らずどの民族でも発しそうな言葉であるが、実施時期や期限がはっきり画定できないときに、アラブ人が特に発する言葉らしい。

まあ、時間感覚がわれわれ日本人や欧米人とは違うことは確かであろう。日本人が会社で仕事を頼むときに、いつまでと期限を切らないときは、大概、すぐにやってくれという意味のことが多い。しかし、スピード感覚が異なるアラブ人が「明日」という場合、実際はかなり先のことであることが多い。欧米人がアラブ人に仕事を頼み、ブクラと言われたら、ほとんどやらないつもりだと怒るそうだが、それも頷(うなず)けるける話なのである。

しかし、これも相手を見て約束をするというアラブ人の原則を頭に入れていれば、アラブ人に限らず誰もが使う、その場限りの「逃げ口上」であることが分かるはずである。

最後に、「マレーシュ」。これは、「気にするな」という意味である。これも、アラブ人はいろいろな場面で使うが、国際的に仕事をしてきた人であれば、驚くにあたらない。

インド・パキスタン系の人たちの「ノープロブレム（問題ない）」、タイ人の「マイキアウ（関係ない）」、さらに、元仏領の国々での「ヤパドプロブ

レム（問題ない）」などがこれにあたる。

これらは、アラブ人特有の逃げ口上ではなく、相手が気にするだろうと判断したことを自分から「気にするな」と先に言い、自分はどうしようもできないことを回避する、初歩的な責任回避の手法である。

この点を理解すると、相手が「問題ない」、「気にするな」と言っても、問題があればそれは問題であるし、気にすべきところは気にすればよいのである。アラブ人について強いて好意的に言えば、「問題がない」と強弁するのではなく、問題があっても「気にするな」と前向きだと言えるのである。なんと、おおらかなことであろうか。

かくのごとく、アラブ人を「IBM」なんぞとステレオタイプでとらえると、自身の人を見る目を疑われることになる。ご用心ご用心である。

さて、かたや、わが日本人のビジネスマンのビジネス交渉の特徴としては、「前向きに考えます」、「前にやったことがありますか」、「前広に根回しします」の、先頭の頭文字をとって「３M」が有名である。

交渉相手から提案や問い合わせがあったときの日本人の最初の反応は、決して拒否や否定をしない。「前向きに考えます」と、理解を示したようなことを言う。しかし、ほとんどの場合、これは、提案として認知した程度で、決して本当の意味で前向きに考えていくわけではない。

さらにもし、「前にやったことがありますか」との質問が加えられたら、あまり提案受諾の可能性はないと考えた方がいい。必ず前例を聞くのは、歴史的に村社会の特徴である。特に、日常業務を繰り返し行っている部署にとっては、極めて重要である。

前例のなさそうな新しい提案などにこの質問を浴びせるのは、潰しにかかっていると理解した方が賢明である。会社社会も、江戸時代の農村地盤村社会の風習を引き継いでいる。チームワークを重視する社会の悪い点は、思想の平準化と、小さな天才でも認めにくい体質が残ることである。

最後の、「前広に根回しします」は、ときには提案への肯定的な反応の場合もあるが、これも大概は、うまくいかなくなるような、根回しが難しいときによく使われる表現である。

直接的な表現を避ける社会が、わが日本であり、「３M」が間接的な断りの表現であることは、日本人以外にはなかなか分かりにくい。

特に、通訳を使って、英語やアラビア語などの外国語でこの「３M」を使うと、話が複雑に縺れてくる。相手がよほどの日本通でない限り、誤解するのは必定である。注意したいものである。

出所：内閣広報室

写2 米国・中東諸国訪問（カタール）時の安倍晋三首相

「おかげさま」と「マーシャ・アッラー」

「マーシャ・アッラー」は、アラビア語で「これぞアッラーの思し召しなるぞ」との意味である。アラブ人は、日本人の「おかげさま（で）」と同じような使い方をする。

ムスレムは、自分が健康だったり、人生が好調だったり、ビジネスの調子がよかったりすることについて、相手や周辺の環境など、自分と神以外の第三者の「おかげ」とは考えないのが原則である。

絶対神アッラーがすべてをお見通しであることから、自分とアッラーとの一対一の関係がすべてであり、感謝の根源もそこにあると考える。

アラブ社会で、貧しい人たちにバックシーシーと言われ、小銭などをあげても、もらった人はシュクラン（ありがとう）とは言わない。いろいろな解釈もあろうが、私は、喜捨の考え方が浸透しているイスラムならではの対応ではないか、と考えている。

小銭をあげた人も、アッラーの帳簿にきちっと記載され、最後の審判で判断材料の一つとなるということなのであろう。

これに反して日本人は、他人・他者さらに自然など、何に対しても「おかげさまで」である。長く続いている日本文化と日本の自然・風土、そして希薄な度合いで浸透している仏教こそ「おかげさまで」の根源かもしれない。

すなわち、自分自身の生存は、自然を含めた周りの庇護や、他の人が作った食料、親・親族や集落の民、国家や宗教など、自分以外のすべてのものの発する善意により守られている、という感覚からできた言葉であろう。

宗教が希薄であり、日本人の大半は仏教の教えを、教典などを通して学んだことなどない。共存共栄、神とて絶対ではないという多神教、アニミズムも依然として残り、自然に対しては特に信仰心が厚いというような社会風土・現象が横溢する社会と言える。

アラブ・イスラム社会とは対極にいるとも言えるのが、わが国の社会文化ではなかろうか。お互いに理解し合うのは、限りなく難しいことを認識すべきである。

マイブラザーとマイフレンド

「サダムはフセインの子供、佐藤はアラビア石油の社員」この最初の表現は、マイブラザーとマイフレンド発想の代表的な表現である。

イラクの故サダム元大統領は有名であるが、日本ではフセイン大統領として通っている。

恥ずかしいことにわが国では、誰かが呼び名を間違えたことから、サダムのことを彼の父親の名前で呼ぶようになってしまった。

もちろん、サダム・フセイン大統領や、イブン・フセイン大統領などという呼び方は正しい。ここで言おうとしているのは、まず、アラブ人は名前が父親の名前の連続からなっている、ということである。

つまり、親族が大変重視される。さらに部族が重要である。会社や組織においても親族や部族のつながり、さらに出身地のつながりが大きな意味を持つ。もちろん宗教の宗派も、この絆(きずな)において同一であることが普通である。

そういった背景があり、アラブ人と親しくなると、「マイブラザー」と呼びかけられることになるのである。親族の一部、特に家族の一部として受け入れるということの、表明なのである。

アラブ人に、別の親しいアラブ人を紹介されるときに「マイブラザーのなにがし」と紹介されることがあるが、すべて本当の兄弟とは限らない。

ちなみに、「マイサン（わが息子）」と言われることは、ないこともないが、難しいし、稀(まれ)であろう。

一方、わが日本人は、ビジネスのときの紹介時に、同僚や同行者を「兄弟のなにがし（マイブラザー）」という枕詞(まくらことば)で紹介することはしない。

英語のカンパニーは、「同僚」よりも「会社」という認識が日本人には強く、紹介するときにマイカンパニーもあまり使わない。むしろ、「マイフレンド」と言う場合が多い。

これは、個人の関係を特に知らしめたいときや、親しい関係の同僚を紹介するときなどに使う。しかし、普通のビジネスでは、自分や同僚のアイデンティティーを示すのに、「佐藤はアラビア石油の社員です」といった紹介の仕方をし、マイフレンドなどの枕詞はつけない。ましてや、親族や部族の説明はしない。むしろ、することの方が変である。

もちろん、そうした日本人の考え方の背景には、自分は所属する会社の人間としてビジネスに来ているので、会社名とその社員として紹介している、それ以外の説明は不要であるとの意識がある。だから、日本人としてはごく当然なのであるが、やはりアラブ社会とは、社会的風土と文化が大きく異なるということであろう。

「リトロアクティブ」はアラブ社会の契約の常識か

「リトロアクティブ」は、英語の単語である。効力が過去に遡(さかのぼ)るとの意味であり、“retroactive”と綴(つづ)る。法律用語では、“a retroactive law”というふうに使われ、遡及(そきゅう)法のことである。

なぜここでキーワードとして取り上げたかというと、私のアラブ社会での経験で、ほとんどの契約や会計規則、税制には、刑法におけるような時効規定が存在せず、取り決めの効力がホスト国（資源保有国）の考え方次第で、どこまでも遡るということがあったからである。

実例を挙げると、サウジアラビアの法人所得税の計算上、たとえば取締役の報酬は損金として認めてきたが、あるとき、損金としては認めないとの判断がなされる。すると、その決定は、その会社の所得税計算の開始時期が30年前だとしても、そこまで遡って計算し直して、所得税の追加支払いを要求される。

内容にもよることが多いが、とにかくホスト国との契約や法定規則の交渉は、決めた効力がリトロアクティブになるものが極めて多い。

日本においても、不法行為に基づく権利侵害や財産権の侵害には、遡及してその損害や被害の賠償を求めることができるが、消滅時効があり、限りなく遡るということはない。私法でも行政法でも、時効の制度は認められる。

サウジアラビアやクウェートのシャリーア法や、欧米法に準じた商法に相当する商事手続きの規則などの詳細は知る立場にないが、現実としてのホスト国の対応は、時効はないとの判断か、規則の改定は改定以降だけではなく、過去の清算済みのものにも遡及できる限り遡及して、その効果を適用するとの考え方が採られている。

このような地域に進出している企業は、大変な「リトロアクティブ・リスク」とも呼べるようなリスクを抱えているとも言える。

最近のプーチン大統領率いるロシア政府が、わが国企業が積極的に参加していたサハリン２プロジェクトに対して、プロジェクトの成功を前に強権的にガスプロム（Gazprom）を資本参加させた背景には、環境問題を契機に「リトロアクティブ」に問題を掘り起こし、決定済みだったこともひっくり返したことがある。

アラブ社会以外にも、同じような法体系をもつ思考が存在していると見るべきであろう。

このような「リトロアクティブ・リスク」、資源保有国の強力なプレッシャーに対してわが国企業が対処するには、やはり、問題が生じそうな案件は、署名権者がお互いに署名しながら、すべて文書で約束していくことぐらいしか手はない（写3）。

この文書が存在しても、仲裁裁判ま

出所：アラビア石油株式会社

写3 アラビア石油利権協定の原本写真

で持っていくのは困難である。契約によっては、仲裁裁判が中東の進出国内やバーレーンで行われるものが多くなっているのが現実である。このようなリスクを民間企業が背負うのは、よほどの大企業でなければ不可能である。

わが国の場合には、リトロアクティブ・リスクを含めた非常に大きな探鉱・開発リスク、カントリーリスクの高い資源開発を、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）、国際協力銀行、日本貿易保険などの政府機関が官の立場からサポートする体制があり、このことの意味は十二分にあると言えるのではないだろうか。

ムガール帝国と長子相続制

イスラム文化との接近遭遇との第３話の最後に、イスラムの帝国のなかでも、インド亜大陸を支配したムガール帝国について触れたい。

中東やアラブの世界で働いた経験のある人たちにも、ムガール帝国の実態はあまり知られていないので、この場を借りて、少し歴史への目を広げ、世界遺産として有名な「タージ・マハル」（写4）を建設した第５代王（皇帝とも称される）シャー・ジャハーン王の時代から、その息子たちの時代を覗（のぞ）いてみたいと思う。

フランス人旅行家ベルニエ（François Bernier）は、シャー・ジャハーン王の４人の息子たちによる内戦の話を見聞きした。そのなかから、17世紀半ばのムガール帝国（図2参照）における、息子たち同士の戦いの勝利者が帝国を相続するという、すさまじき相続制度に触れ、王制・帝国における王位・帝位継承問題を考える。

ベルニエの記録に直にあたりたい方は、“Voyages de François Bernier”（1699）が原典で、日本語訳では『ムガル*3帝国誌（一）、（二）』（岩波文庫）があるのでご参照願いたい。

ムガール帝国は、ムスレムによる五つの奴隷王朝の支配が続いた北インドにできたイスラム王朝の最後の巨大帝国として誕生した。1526年に、ティムールの血をひくモンゴル系トルコ人であるバーブルが、アフガン人のローディー朝を打ち破り成立させた。

バーブルは初代皇帝（以後皇帝と王は同じ意味）であり、図1に示すような歴代の皇帝の下、ほぼインド大陸の北部、中部を中心に全域を支配する大帝国を打ち立てた。

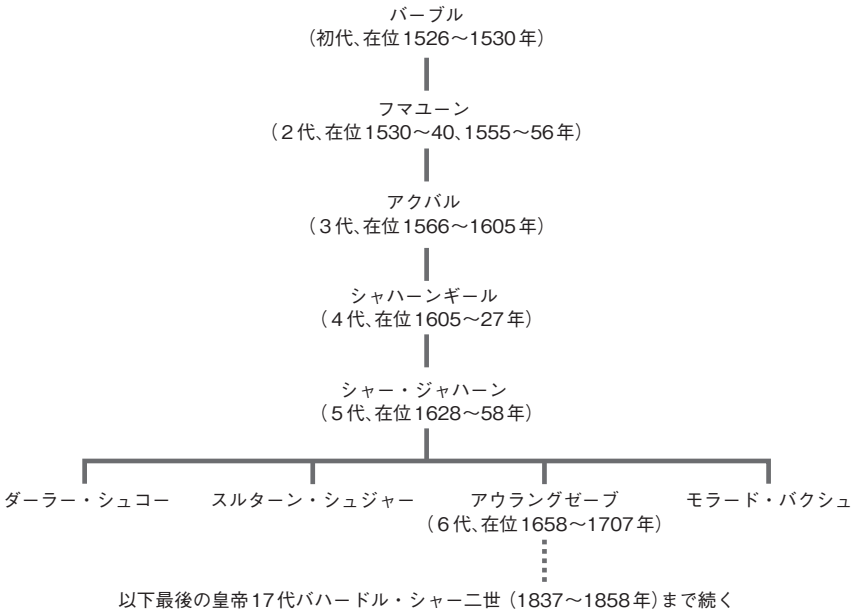
今回ご紹介する、親兄弟入り交じった骨肉の争いは、この第５代王シャー・ジャハーンの跡目を争う戦いである。

シャー・ジャハーンは、その統治や思想よりも、インド観光の目玉であるタージ・マハル廟を造った王として有名である。

私も一度訪れたが、その美しさと、敷地を含めた広大なシンメトリー構造と純白な大理石のイスラム建築、ジャムナー河と対岸の王の居城アグラ城との位置関係の妙、また、その建築内部の造作や配置、材料の豊かさには目をみはるものがあった。

その名のタージ・マハルは、愛妻ムムターズ・マハルの名前の接頭語を省き、ターズの「ズ」が「ジ」に変化したもので、愛妻の名前そのものである。まさに、妃の廟（びょう）として建設された。

内部の見学には、靴を脱ぐ。中央の八角の部屋の中心に妃の墓がある。周辺の部屋から大理石の透かし彫りを通して、この墓に光が差し込むようになっている。



出所：ムガル帝国誌（一）ベルニエ著、岩波文庫を基にJOGMEC作成

図1 ムガール皇帝系図

＊３：「ムガール帝国」が一般的呼称なので文中ではこれを使用するが、書名は「ムガル帝国」である（執筆者）。

14人の子供をもうけた妃は、王が即位した翌年に亡くなった。この廟は、亡くなった翌年から22年間もかけて完成させたそうである。

タージ・マハル完成後、シャー・ジャハーン王は、ジャムナー河の対岸に黒大理石で自分の廟を造り、対岸との橋を造る計画だったと言われている。

しかし、跡目を狙う王子たちの内紛のなかで、王は三男であるアウラングゼーブ王子（後に第６代王となる）に捕らえられ、幽閉されて、その夢は実現しなかった。いまは、タージ・マハルに妃と並んで埋葬されている。

タージ・マハルのあるアグラの町は、観光客がひっきりなしに訪れる、いまでも賑（にぎ）やかな地方都市である。

民衆のほとんどはヒンズー教徒であるにもかかわらず、当時もそうであったように、建物のイスラム建築に違和感を持っていないように感じる。ガイドのインド人ヒンズー教徒は、私に、タージ・マハルはインドの宝であり、こんな建築を造ったインド人は素晴らしいと屈託なく話していた。

ヒンズー教は、イスラム以前から民衆を含めたインド全域に広がっていたが、一神教ではないので、北方から訪れた支配者層の宗教を、例えそれが一神教であろうが、受け入れてきた寛容な宗教であったのであろう。

ムガール帝国末期、ムガール支配層はイギリスの進出に手を拱（こまぬ）くしかなかった。それは、宮廷内の闘争に加え、一般民衆が人種・宗教・風俗・思想・生活などすべてにおいて支配層と遊離が進んでいたこと、さらには、彼らのレゾンデートルであり、一番重要であった軍事力すらなくなっていたことで、彼らはすでに無気力になっており、ムガール貴族は大国の支配者たる地位を失っていたことに起因する。

このシャー・ジャハーン王が70歳を過ぎたころ、４人の息子は、最も重要な四つの州・国の王の名代に任命され

出所：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より

写4　タージ・マハル廟（インド）

出所：ムガル帝国誌（一）ベルニエ著、岩波文庫を基にJOGMEC作成

図2　17世紀半ばのムガール帝国

た。

長男のダーラーはカーブルとムルターンへ、次男のスルターン・シュジャーはベンガル国へ、三男のアウラングゼーブはデカンへ、四男のモラードはグジャラートへと、それぞれ送られていた（図2参照）。

それぞれから上がる収入は、それぞれが自分の手に収め、多数の兵力を養っていた。

ムガール帝国ではそれまでも、長子相続制は採られていなかったが、長男のダーラーは、父の跡を継ぐという強い意志を持っていた。

しかし、シャー・ジャハーン王は三男アウラングゼーブ王子の長所を高く買っており、彼が兄弟のなかで一番君主の才能があると思っていたと伝えられている。

シャー・ジャハーン王が回復の見込みのない病に伏せると、次の王の継承権をめぐって４人の兄弟が仲違（なかたが）いし、５年間にわたって骨肉の争いが続いた。

他の兄弟をすべて打ち破り、第６代皇帝になったのは、シャー・ジャハーン王が認めていた三男アウラングゼーブ王子であった。

この間の、権謀術策と残虐非道な大内乱については、今回紹介した「ムガル帝国誌」に詳述してある。

ムガール帝国の官僚や軍隊司令官はペルシャ人が主力で、トルコ系、アラブ人もいたと言われている。もちろん、ヒンズー教徒の地元の有力者も重用された。キリスト教徒ですら、砲兵隊には多く雇われていた。

世界史のなかで、征服王朝の支配者が絶対権力を持つ場合に共通するのは、皇帝・王位をめぐる骨肉の争い、王の大きな後宮、宦官（かんがん）・茶坊主、外人傭兵（ようへい）・親衛隊、異教徒の官僚、王の想像を絶する大狩猟の旅、大々的な廟の建立などの存在が挙げられるが、このすべてが、ムガール帝国では王だけに存在した。

したがって、王にならなければ、王子といえども安心立命はなく、王子たちも絶対権力者である王への就任をめざして、宮廷内での毒殺や暗殺などの危険に日夜晒（さら）されていた。

さて、シャー・ジャハーン王の跡目は、兄弟との戦いの後にアウラングゼーブ王子が継ぐことになったことは、既に述べた。

イスラム帝国において、長子相続制――クルアーンでの女性の取り扱いからして、長男相続制となるのであろうが――が歴史的に採られていれば、長男なき場合は男子の直系に承継されるような方式が確立され、内乱は避けられたかもしれない。

しかし、絶対権力、すなわち軍事力を背景にした、力にしか正当性の根拠がない帝国の場合は、肉親であろうがなかろうが、力のあるものが権力に就かなければそれに欠けるものとなり、力による正当性がより重要な論理であった。

この考えがはっきりと表れたのが、ムガール帝国の大内乱であった。

跡取りのなかに力のあるものが見あたらず、その血統のみを権威の象徴にする場合、軍事部門の長が、たとえ傭兵や奴隷であろうが、覇権をとり、王朝や帝国を牛耳ることになる。イスラムの王朝のなかには、この段階に至るものが数多く存在する。

さらに、覇権をとった実力者が、自ら王朝を開いたこともあった。イランのパーレビ朝や、エジプトのマムルーク朝などはこれの代表的なものである。

皇帝や王が、部下の実力者に両目を潰されて居城に幽閉されるなどのことは、ありふれたことであった。マムルーク騎士（図3参照）と奴隷王朝の話などは、調べ始めたら中東からインド亜大陸にかけての王朝攻防史として興味深い物語になる。

当時29歳のナポレオン・ボナパルトが、地中海をエジプトに向かいマルタ島を制圧し、３万3,000人の大兵力と考古学者・文官などを同行して、エジプトのマムルーク朝と戦ったのは1798年であった。

マムルーク朝は、前王朝のアイユーブ朝時代に、コーカシアン出身の頑強で美貌に富んだ奴隷であった美少年たちが戦士として訓練され、彼らが実力を蓄えて反乱を起こし、アイユーブ朝のスルタンを殺害して樹立した。マムルークとは、買われた男、奴隷を意味する。

ナポレオンの国民軍と戦ったのは、きらびやかな衣装に身を包んだ騎士たちであった。彼らは、歩兵を連れ、名乗りをあげ戦った（図3参照）。

出所：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より

図3 マムルーク

源平合戦スタイルと、フランス革命により創出された国民軍が互いに戦ったのだから、勝敗は目に見えていた。中世のままの中東アラブ世界と近代へと脱皮したヨーロッパの接触は、ヨーロッパの絶対的な優勢へと歴史の舵を切っていく。

ともあれ、現代ですら中東アラブ世界は、王朝制や、それを擬した制度を採っている国々もあり、王位や首長位

の継承が大きな国家的問題となる。それは、その対象国だけでなく近隣諸国や地政学的な意味で世界へも影響を与える。いまでも、長子相続制のテーマは存続しているのである。

執筆者紹介

庄司　太郎（しょうじ　たろう）

ふるさと：1953年宮城県白石市に生まれる。
学歴：1976年東北大学法学部法律学科卒業
職歴：1976年アラビア石油㈱入社、ニジェールのテキダンテスムにて、ウラニウム探鉱に従事（２年間）、サウジアラビア・カフジ鉱業所勤務（２度、９年）、クウェートにてクウェート事務所に勤務（４年）の海外勤務を含め、石油を中心にした、資源開発に従事。現在、石油鉱業連盟企画調査部長、中央鉱山保安協議会石油鉱山保安部会専門委員、国際資源開発人材育成検討会委員
趣味：蚊の研究、車、鉄道旅行
興味：エネルギー安全保障、イスラム、サウジアラビア・クウェート地域研究、インド・タイ地域研究、外国人の教育訓練
家族：妻、長男、インディー（愛犬）

JOGMECは、
豊かで安定した暮らしに貢献します。

JOGMEC

備蓄業務

JOGMECは石油をはじめ、液化石油ガス（LPG）、コバルトやモリブデンなどのレアメタルを、国内に蓄えておく事業を推進しています。国家および民間企業によって備蓄が行なわれ、暮らしの安定化に貢献しています。我が国への供給が不足した場合は、備蓄物資の放出・売却も行ないます。

備蓄業務への取り組み≫

石油の備蓄

石油の備蓄については、1972（昭和47）年度から民間備蓄事業が開始され、つづいて1978（昭和53）年度に、国家備蓄事業が開始されました。

■石油備蓄量・日数（2005年3月末現在）

国家備蓄	5,099万kl（原油）	92日分
民間備蓄	3,899万kl（製品換算）	74日分

秋田国家石油備蓄基地

上五島国家石油備蓄基地

液化石油ガスの備蓄

液化石油ガスの備蓄については、1981（昭和56）年度から民間備蓄事業が開始され、国家備蓄事業は2010（平成22）年度150万トンの備蓄達成に向け現在基地建設を行なっています。

福島国家石油ガス備蓄基地
（2004年7月時点）

神栖国家石油ガス備蓄基地
（2004年7月時点）